

第69回 日本心臓病学会学術集会

来てごしない🍊米子市へ

会 期 ▶ 2021年9月17日(金)・18日(土)・19日(日)

会 長 ▶ 山本一博

(鳥取大学医学部統合内科医学講座循環器・内分泌代謝内科学分野)

会 場 ▶ 米子コンベンションセンター BIG SHIP
米子市文化ホール

●開催方式

現地参加とウェブ配信(リアルタイムライブ配信+オンデマンド配信)・
ウェブ参加によるハイブリッド方式(予定)

●ホームページ

<http://www.jcc-conference.org/69jcc/>



●今後の予定

一般演題(口演) 採否通知/日時・会場通知 : 2021年 **6月末**ごろ

指定演題 日時・会場通知 : 2021年 **6月末**ごろ

オンライン参加申込受付開始 : 2021年 **7月中旬**

事務局

鳥取大学医学部統合内科医学講座循環器・内分泌代謝内科学分野
〒683-8504 鳥取県米子市西町36番地の1
TEL:0859-38-6517/FAX:0859-38-6519
office@jcc2021.jp

プログラム「見どころ聴きどころ」

特別講演

「英国における新型コロナウイルスパンデミック」 <ウェブでのライブ講演>



鈴木 亨（英国レスター大学）

【ご略歴】英国レスター大学医学・生命科学研究科副研究科長ならびにレスター・ライフサイエンス・アクセラレーター研究所長。東京大学循環器内科での勤務を経て 2014 年に渡英、レスター大学循環器内科の教授として大学ならびに附属病院で勤務し、臨床と研究の両方に従事する。職場である附属グレンフィールド病院は英国の循環器疾患の拠点病院である。2020 年から副研究科長ならびに医療・ヘルスケアのイノベーション研究所長に就任。

症例検討会

「隠れた心血管疾患を見つけるーハイリスク患者の同定とフォローー」

座長：大西 哲存（兵庫県立姫路循環器病センター）／楠瀬 賢也（徳島大学）

わが国では新規発症心不全患者数が増加の一途を辿っており、“心不全パンデミック”とも呼べる状況となっている。心不全はひとつの病気ではなく、心臓のさまざまな病気や高血圧などにより負担がかかった状態がおきた後に、最終的に至る症候群である。そのため、心不全の原因を明らかにすることは診断や治療において必要不可欠である。心エコー図検査は心腔の形態や機能のみならず、心筋の機能や心腔内の流れや圧力を評価できるようになり、臨床における中心的役割を果たすことに異論はない。心不全の原因として評価に迷う、あるいは見落としがちな心血管疾患に関する症例提示を通して注意すべきハイリスク患者を明らかにし、明日からの日常診療に生かせる時間としたい。本セッションでは弁膜症および先天性心疾患の症例提示を実施した後に、治療の選択肢を提示し、pros と cons に分かれての議論を予定する。

「心臓Point-of-Care超音波検査の有用性とピットフォール」

座長：村田 光繁（東海大学）／山田 博胤（徳島大学）

ベッドサイドで施行する Point-of-Care 超音波検査（POCUS）が急速に普及しています。心臓 POCUS の基本プロトコルとして Focused Cardiac Ultrasound（FoCUS）が提唱されていますが、断層法のみによる限定した断面での観察であり、ピットフォールも存在します。本セッションでは、日々の診療で診断に苦勞した例、FoCUS では診断できなかった例などについて症例検討会を行い、POCUS 初心者や心エコー図を専門としない医師が FoCUS を利用するときには留意して置くべきポイントについて提示していただき、POCUS の有用性と限界、限界をオーバーカムするために何に注意したらいいか、について再確認したいです。

オーディエンスレスポンスシステムを用い、参加者がいっしょに考えることができるセッションにしたいと思います。

「高齢者に対する低侵襲治療—有用とばかりは言えない—」

座長：林田 健太郎（慶応義塾大学）／久保 俊介（倉敷中央病院）

TAVI や MitraClip に代表される高齢者に対するカテーテル治療は、その低侵襲性と良好な臨床成績のゆえに急速に本邦でも普及しつつある。しかし一方で、カテーテル、外科手術を問わずどのような侵襲的手技においても治療の結果が期待通りとならない場合もあり、適応については日々個々の症例で綿密に検討しつつ、我々術者としてもそのギャップを埋めるために日々努力を続けている。本セッションでは適応に悩み予想通りの結果とならなかった症例をあえて取り上げることで、今後の我々の課題を浮き彫りにし、前向きな対策を検討していくことが狙いである。

「院外心停止患者をいかに救うか—来院前から在宅復帰までの問題点を考える—」

座長：中島 啓裕（国立循環器病センター）／加藤 雅也（広島市立安佐市民病院）

院外心停止は先進国の重要課題であり、本邦で年間100,000件以上が発症しています。そして、その最も大きな原因が心血管疾患です。近年、蘇生科学は発達を遂げたものの院外心停止の社会復帰率は依然7%程度と低く、この課題を解決するためには、病院前救護体制、病院収容後の初期治療、循環器集中治療管理、リハビリテーションから外来へとといった各々の治療フェーズに対して循環器医と集中治療医の連携および多職種チームで取り組んでいく必要があると考えます。本セッションの目的は、循環器救急医療に積極的に取り組んでいる施設から、症例検討をベースに院外心停止の各フェーズにおける最新の取り組みを紹介して頂き、院外心停止患者の社会復帰率向上に向けて対策を講じることです。昨今のCOVID-19パンデミックにおいて、時間が重要な因子である院外心停止の治療も影響を受けています。また、超高齢化社会により複雑化した患者背景は集中治療をより難しくしています。これらも踏まえて、地域メディカルコントロール体制の構築、センター集約化や循環器集中治療医の必要性について議論していきます。明日からの循環器救急医療の実践に少しでもお役に立てることを期待しています。

「循環器領域における遠隔医療—実臨床から学ぶ—」

座長：弓野 大（ゆみのハートクリニック）／西井 伸洋（岡山大学）

COVID-19パンデミックにより、時間と空間を超えた医療提供である遠隔診療がさらに必要とされている。循環器領域においても不整脈や心不全領域における植込み型および体外式の生体情報を遠隔モニタリングする機器の進歩が目覚ましい。一方で、現場に目を移すと、地域の医療者は、非専門の多施設多職種の医療介護職らがチームを組んで、患者をみていかなければならない、そして患者サイドにおいては独居・老老介護・貧困などがあり、リテラシーやコストの問題が残っている。しかし、これからの多様性、効率性、専門性がさらに問われる医療形態を考えると、ICTを用いた遠隔医療が実臨床で応用されていく必要がある。本セッションでは、植込み型デバイスから心不全と不整脈について、体外式の生体情報の遠隔モニタリング、オンラインでの循環器診療、また患者へ系統だった遠隔ケアを行うテレナーシングについて、本邦で先進的に取り組んでいる先生方から、症例を提示いただき、私たちがこれからさらに何をしなければならないのか、皆で考えることができればと思う。

「COVID-19と循環器疾患」

座長：瀬尾 由広（名古屋市立大学）／岸 拓弥（国際医療福祉大学福岡薬学部）

2020年初頭では、このような世の中になることは誰も想像していなかったであろう。COVID-19感染はすでに3回の爆発的な感染者数の増加をすぎてもなお収束の見通しが立っていない。社会全体な影響は想像を絶するものであり、医療はこれまで経験したことのない状況に陥っている。循環器診療体制も、救急医療体制は切迫した地域もあった。日本心臓病学会も含まれる循環器関連学会の集合体である日本循環器連合においても、様々な取り組みがなされている。そこで本セッションでは、実際にCOVID-19重症例を現場で治療にあたった3人の医師からリアルな振り返りを提示していただき、そこから循環器内科医が学ぶべきこと・今後活かすべき経験をシェアすべく、症例検討を行う。